

公開講演会

12:30～13:50 奏楽堂

司会：高瀬 澄子
コメンテーター：前原 恵美

伝世する古楽器の保存と活用

—紀州徳川家伝来楽器コレクションを例に—

日高 薫 (国立歴史民俗博物館)

国立歴史民俗博物館（以下歴博という）が所蔵する紀州徳川家伝来楽器コレクションは、紀州藩の第十代藩主徳川治宝（1771～1852）によって収集されたわが国最大級の古楽器コレクションである。総数162件、234点におよぶ資料群は、雅楽器を中心に各種楽器20数種と、楽譜30件、その他附属品等から構成される。数量や種類の豊富さ、幅広い制作時期の楽器や大陸製の楽器、調律具等を含むことから、楽器史・音楽史研究上、極めて重要な資料として注目されてきた。さらに、楽器表面に施された各種装飾や、箱・筒・袋などの収納具は、美術工芸品としても価値が高い。

しかしその一方で、破損しやすく保存状態の悪いものを多く含む点や、大型資料が多く扱いが難しいこと、各種素材・技法が混在すること、多数の附属品・附属文書をいかに整理・管理するかなど、保存・管理上の問題が多く、また背景となる文献資料に乏しいなど、調査研究にとって必ずしも好条件とはいえない要素も少なくない。さらに、モノとしての楽器を通じて、かたちとして残らない音楽をいかに復元し、いかに公開していくかという根本的な課題を抱えている。本講演では、歴博が紀州徳川家の楽器コレクションを対象におこなってきた調査・研究・展示公開等について紹介するとともに、それらの取り組みの過程で浮彫りになった課題や所感等についてお話しし、今後の古楽器の保存・活用に関する議論の一助としていただければと考えている。

1953年に紀州徳川家を離れたコレクションが、財団法人松江博物館、文化庁、東京国立博物館を経て、歴博所蔵となったのは1983年である。以降、1992年開催の企画展示「弾・吹・打—日本の音楽とその系譜—」のほか、他館が主催する企画展示等に出品される機会も少なくなかったが、歴博がコレクションの全容に関わる調査に本格的に着手したのは2001年度からである。資料図録の刊行を目標として、全資料のコンディション・チェックと既存の目録との照合作業（附属品・附属文書の確認を含む）、法量・素材・技法・意匠等の調査、文書の翻刻、撮影、関連資料の調査等、基礎データを収集・整理し、2004年度に比較的詳細な資料図録を刊行した（『国立歴史民俗博物館資料図録3 紀州徳川家伝来楽器コレクション』）。翌2005年度には、図録の個別解説と同じ内容を「れきはくデータベース 館蔵紀州徳川家伝来楽器」として公開するとともに、特別企画「紀州徳川家伝来の楽器」を開催した。その後は2年に一度程度の間隔で小規模の展示を継続し、企画展等に出品される機会が少ない資料も含め公開に努めている。

一連の調査研究の過程で改めて注目したのは、この資料群の音楽史の範囲にとどまらない

歴史的価値である。すなわち、能楽が武家式楽として確立していた時代に、宮中所伝の雅楽の楽器を精力的に探求した治宝の楽器蒐集のありさまを、各々の楽器に附属するさまざまな文書によって裏付けることができ、コレクションの形成過程や、関与した人的ネットワークに関する豊富な情報を有する希有な事例として、総合的な調査研究の対象とすべき貴重な歴史資料であることを強く認識した。同時に、境界領域にあり、捗々しい進展を遂げたとは言い難い楽器史研究の状況も実感した。

そこで資料図録の欠を補うべく開始したのが、高桑いづみ氏を代表とする共同研究「紀州徳川家楽器コレクションの研究」（歴博基盤研究・資料の高度歴史情報化と資料学的総合研究、2006～2008年度）である。この共同研究は、音楽史、楽器史を中心に、工芸史、文献史学、自然科学の研究者を含む多角的視点からの楽器研究をめざして計画されたもので、『国立歴史民俗博物館研究報告 特集号「紀州徳川家伝来楽器コレクションの研究」』（2011年）として成果を公刊した。実験的な段階にとどまったものの、電子顕微鏡による観察や透過X線撮影、琵琶・琴箏類内部の小型カメラによる観察など科学的調査を積極的におこなったのは、この種の調査は所蔵者側が主導して実施するのが最も望ましいと考えたためである。

続いて2012年には、コレクションの音楽史的側面に光をあてた企画展示「楽器は語る—紀州藩主徳川治宝と君子の楽」を遠藤徹氏の監修のもと開催することができた。ここでは、治宝による蒐集の意義を当時の音楽的文化的動向から考察する新たな視点を提示するとともに、古楽器や伝統音楽を体験的に理解してもらうための映像・デジタルコンテンツの開発や、律管の音高測定など新しい試みもおこなった。館外の音楽研究者が多数参加する展示プロジェクトでなければ実現しなかった展示といえる。

古楽器の調査や展示・教育活用の現場に携わる身として頭から離れないのは、「博物館が所蔵する文化財としての楽器と、博物館の外で形を変えながらも生き続けている楽器とのあいだの溝をどのように埋めていけるのか」という問いである。資料の現状保存を第一としつつも、それが音を奏でる器であることを常に意識しながら、最良の調査・活用手段を開拓・選択する姿勢が望まれる。

[プロフィール].....

HIDAKA Kaori 国立歴史民俗博物館教授（専門：漆工芸史）

【著作】

『生田コレクション 鼓胴（国立歴史民俗博物館資料図録13）』（国立歴史民俗博物館、2024年）、『楽器は語る—紀州藩主徳川治宝と君子の楽』（共著、企画展示図録、国立歴史民俗博物館、2012年）、『紀州徳川家伝来楽器コレクション（国立歴史民俗博物館資料図録3）』（共著、国立歴史民俗博物館、2004年）